

二松学舎大学附属図書館蔵

『山路の露』について

——新出の二類本としての紹介と位置付け——

小川陽子

はじめに

『山路の露』の伝本は、版本（いわゆる「絵入源氏物語」付載本および「統群書類従」所収本）とその書写本を中心とする一類本、それに対し後半部に大きな異同を持つ写本群である二類本、という二系統に大別される¹⁾。諸本の大部分を占めるのは版本とその書写本であるが、その他の写本として次の諸本が知られている。

（一類本）

宮内庁書陵部蔵本（乙本）・天理図書館蔵本

（二類本）

前田家尊経閣文庫蔵本・東海大学桃園文庫蔵九条種通筆本

祐徳稲荷神社中川文庫蔵本・故本位田重美氏蔵本（甲・乙本）

京都大学附属図書館蔵平松家本・宮内庁書陵部蔵本（甲本）

島原図書館松平文庫蔵本・筑波大学附属図書館蔵本

これらに加え、このたび二松学舎大学附属図書館竹清馬越文庫所蔵の一本を拝見する機会に恵まれた。同本は「二松学舎大学附属図書館蔵の『国書総目録』」(昭)63「二松学舎大学附属図書館編」に記載があるものの、『国書総目録』『古典籍総合目録』に採録されておらず、従来の伝本研究において未紹介のものである。書誌等、詳しくは次節以下に譲るが、結論から記せば、その本文上の特徴から二類本の一伝本と認められる。

『山路の露』は近世初期に複数回にわたって出版されたこともあって、中世王朝物語の中では現存伝本が比較的多いものである。しかし、その多くは版本の書写本すなわち一類本であり、右に挙げたように二類本は従来九本が知られるのみであった。このような状況にあつて、二松学舎大学蔵本を新たに二類本の一つに加えることは、この作品の本文とその伝流を知る上できわめて喜ばしいことと言えよう。

本稿ではまず二松学舎大学蔵本の書誌と伝来事情を確認した上で、二類本諸本における位置付けを明らかにしていきたい。

一 書誌および伝来

まず当該本（以下、二松学舎本と略す）の書誌を記す。

外題「山路の露」（題箋左肩。金泥で模様あり）。表紙右肩に「源氏ものかたり追加」と打付書（墨書）。列帖装。薄茶色紙表紙。本文鳥の子紙。縦二三・六cm×横一七・五cm。一面十行。下部に若干の

虫損あるが保存状態良好。蔵書印は、表紙右肩に「吉野弘隆蔵書」、「不秋草堂」、「十八公舎印」、一丁表右下に「竹清・馬越文庫」、「二松学舎大学図書館蔵書」、一丁表右肩に「二松学舎大学附属図書館印」とあり。

奥書等がないため書写事情は不明と言わざるを得ないが、伝来については、鈴木弘恭、吉野弘隆の手を経て三村竹清の蔵にかかり、竹清馬越文庫の一部として二松学舎大学に収蔵されたことが蔵書印によつてうかがえる。

このうち三村竹清については、『三村竹清集』第十卷（日本書誌学大系）23（10）平8・青装堂書店に竹清自筆の蔵書目録「収得書目」が影印で収められている。その乾卷「や」の項には確かに当該本と目される「山路の露」の記録が見出される。

哥文 山路之露 源氏追加 寫本 一、四四年六月三十日
文行 五十ノ内

「哥文」は分類名、「四四年六月三十日」は購入年月日である。「文行」はおそらく古書肆「文行堂」の略で、これについては『三村竹清集』第十卷「後記」に編者（肥田晴三・中野三敏氏）によつて次のように記されている。

横尾勇之助との関係もあつて、文行堂よりの購入が圧倒的で、浅倉屋・村口・鹿田などの名も散見し、陳列とあるのは即売会であろう。

「山路の露」もまた、文行堂からの購入書の一つであつたと見てよ

いだろう。続く「五十ノ内」であるが、目録に見える他書の多くはこの部分に購入価格が記されており、当該書の場合は複数冊まとめて購入したうちの一冊であることを記したもののようである。たとえば「百人一首」も同時に購入された書の一つだったようで、同書の項には「四四年六月晦
文行五十ノ内」とある。

この記録により、三村竹清が明治四十四年六月三十日に文行堂から当該書を求め、その蔵書の一部としたことが確認されるのである。知られるとおり、竹清の蔵書は天理図書館、早稲田大学演劇博物館にも伝えられているが、当該書の場合は、『源氏物語』の「こうばい」「さはらび」はじめ多数の書と共に二松学舎大学に収蔵され、現在に至るものと推察される。

二 二類本としての特徴と分類

さて、はじめに述べたとおり、二松学舎本は二類本に属する一本と考えられる。この点について、具体的な本文を示しつつ確認しておきたい。伝本二系統分類の際に最も重要な指標となる用語後半の約一丁分の異同部分について、両系統の本文を掲げた後、当該本の本文を提示する。両系統の本文の引用は、山内洋一郎氏が二系統を対校の形で示された『源氏物語山路の露 本文と総索引』³⁾に拠る。

【例1】

〔両系統共通部分〕二類本が主行、一類本を対校

いゝまぎらはして打そむきたまへるかたはらめ、あひ行づき、
いひ知ずをかしげなるを、いとゞしく、かなしとおもへり。

〈二類本独自本文〉

「都にもたれかはしりきこえん」などいひて、尼君のかたへ「つ
きせぬことどもを返くうれしくも有がたくもさまゞく思ひみ
だれ侍、いかさまにもかさねてやま路わけ侍らむおりぞ、心し
づかに」などいひ入たる。(中略) 姫ぎみは、なごりもこひしく
打ながめて、さまゞく成ける身のありさま、おぼしつゝけて、
なをさめやらぬ夢のこゝちし給にも、よろづをそぎすてゝ、お
こなひをこゝろに入給て、いとゞし給。

〈一類本独自本文〉

「みやことでもなにかさのみ人めしげう侍らん。ことさら山里
びてつくらせ侍べき」など、御心につくさまにきこえなすも哀
なり。(中略) 道すがらみるそのあたりの山さへかすかにとをう
なるまゝにいとゞ心ほそくて、かしこには又なごりかなしくて、
ながめ給ふまぎらはしに、君は例のこやのをこなひに心入給へ
し。

〈両系統共通部分〉

うこんは其くれほどに殿へまゐりたればひよりも人すくなに、
しめやかにて、はしつかたにみすまきあげて、笛吹きすさびて、
をしますほどなりけり。(四六頁七行、四九頁三行)

両系統に異なるのは、浮舟母と右近が小野を訪れた場面である。

二松学舎本の当該箇所は次のようにある。

〈両系統共通部分〉

いひまぎらはしてうちそむき給へるかたはらめいひしらすおか
しげなるをいとゞかなしとおもへり

〈両系統相違部分〉

みやこにもたれかはしりきこえんなどいひてあま君のかたにつ
きせぬ事ともをかへすくうれしくもありかたくもあさましと
もおもひみたれ侍るいかさまにもかさねて山ちわけ侍らん折そ
心しつかになといひ入れたる(中略) 姫君はなごりも恋しくう
ちなかめてさまゞく成ける身のありさまおぼしつゝけてなをさ
めやらぬゆめの心ちし給にも萬をそぎすてゝおこなひを心に入
給ていとゞし給へし

〈両系統共通部分〉

右近はそのくれほどにとのへまゐりたればれいよりも人すくな
にしめやかにてはしつかたにみすまきあげてふえふきすさみて
おはしますほど也けり

多少の異同はあるものの、二類本独自本文とほぼ同じであることが
わかる。さらに、両系統の大きな異同として指摘されているもう一
箇所についても確認しておきたい。これは先ほどの例がそれぞれに
異なる本文を有していたのとは違って、二類本のみが一文を増補し
て有するものである。

【例2】

〔兩系統共通部分〕

ましてはかなきしも人^トも人^ノなどは、この御方の^トことゝいへば、^トまめやかに出入りなむをやくとしけり。

〔二類本独自本文〕

あまぎみも明くれみたてまつりあつかふをこそ、此世のなぐさみ、山ざとのひかりとおぼしつるを、いみじき御とぶらひどもに、御くにのやまにあまるばかりなるに、こちたきまでほとけはかの世このよたすけたまふとも思ひしる。

〔兩系統共通部分〕

のどやかなるゆふつかた、大将の君^ハ・兵部卿のみやへまいりたまゑるに、「宮はた^ト今なん六条院にわたりたまへる」ときこゆれば、たいの御かたへまいりたまへり。

(五四頁四行十二行)

次に二松学舎本の当該箇所を挙げる。

〔兩系統共通部分〕

ましてはかなきしも人などは此御かたの事といへはまめにいて入をなんやくとしけり

〔二類本独自本文〕

あま君もあけ暮見奉りあつかふをこそこの世のなくさみ山ざとのひかりとおぼしつるをいみじき御とぶらひとも此山のおくにあまるはかり也こちたきまでほとけはかのよこの世たすけ給ふともおもひしる

〔兩系統共通部分〕

のとかなる夕つかた大将の君兵部卿の宮へまいり給へるに宮はた^ト今なん六条院にわたり給へりと聞ゆればたいの御かたにま
いり給へり

【例1】と同様、やはりこの箇所も二類本に特徴的な本文を持つて
いることがわかる。

以上のように二松学舎本は、伝本二系統を識別する大きな指標となる二箇所ともに、これまで二類本とされてきた伝本群とほぼ同じであることから、二類本に属する写本であると認定できるのである。

なお、二類本の派生にあたっては、【例1】の独自本文をその周囲の本文と同化させるために、他の場面でも細かな本文修正が行われたと考えられる。その顕著な例として旧稿³では①「類本で諸本「山道」とある三箇所がすべて二類本では「山路」とあること、②【例2】直前に「かかる光を」と言葉が補われていること、の二点を挙げた。これについて二松学舎本を確認すると、次のようにある。

【例3】①「山路」と「山道」

○二松学舎本

A 此山路³わくる御つかひにもさしいて見へんはつゝましくて

B たひく³かうやまち³わけたたまふ御しるしなくてんはや

C 山路³になりてそ御むまをたてまつりける

○一類本(諸本異同なし)

a 此山道³わくる御つかひにも、さし出みえんことはつゝまじう

て

b 度々かう 山道 わけ給ふ御しるしなくてや

c 山道 になりてぞ、御馬にはのりうつり給ける

【例4】②「かかる光を」の有無

○二松学舎本

ほとけのかがる ひかり をみち引給へるなりけり

○一類本（諸本異同なし）

ほとけのみちびき給へるなりけり

他の二類本諸本と同様に、①はいずれも「山路」とあること、②も「かかる光を」の語を持つことから、細かな部分においても二類本の特色を有することが確認されるといえよう。

三 二類本諸本における位置付け

右のように二松学舎本を認定すると、現在確認される二類本は全部で十本となるわけであるが、稿者は先に当該本を除く九本についてその相互関係を考察している⁵⁾。これに基づき、二類本諸本の中の二松学舎本の位置付けを考えるとしたい。

まず二類本の諸本はそれぞれに仮名にして十文字以上の比較的大きな脱落を有している。二松学舎本もその例外でなく、以下のように六箇所にわたって認められる。それぞれ二松学舎本の本文を示した次に前田家尊経閣文庫蔵本（以下、前田家本と略す）の本文と

その所在を挙げ、二松学舎本の脱落部分に「★」印、前田家本の該当箇所に傍線を付す。

【例5】

ア事とも★こそ

↓ことともをやつひ給ひてしことともこそ (二十三ウ・1)

イをはす★やうなりし

↓おはすへかめれあさましき御いろのふかさなりやなとくち

ウ御めくみを★聞えんに
↓御めくみをよるこひ思ひ給ふ心ふかけれともきこえさせん

エかくろへ給★ところはいとひろく
に (三十一オ・5)

オなをおしき人の★たひめんも

↓かくろへ給しあやしきやとはおほえさせたまふや所はひろく (四十三ウ・8)

カををしき人のいふなるとしのくれかきりのたいめんも (五十二オ・1)

これら六例のうち、ア、エは京都大学附属図書館蔵平松家本（以下、京大本）・宮内庁書陵部蔵甲本（以下、書甲本）・島原図書館蔵松平文庫蔵本（以下、松平本）に、それぞれ共通して見える脱落であることに注意しておきたい。二類本の場合、脱落箇所の共有具合によって他の伝本とのおおよその位置関係が判断できることは、旧稿で述

べたとおりである。二松学舎本は右の状況から見て、京大本・書甲本・松平本の三本、中でも書稿本・松平本との親近性が認められると言えよう。このことは、次の例からもつかがうことができる。

カみちのほともさなからうつゝともおほえすうれしども★いま
そかの物のけに

↓みちのほともさなからうつゝともおほえすうれしどもあざ
ましともいまそかのものけの(四十五才・7)

前田家本と比較してわかるとおり、二松学舎本の脱落は「あさましとも」に限られる。ところが、書甲本・松平本はその直前の破線部「うれしとも」から二松学舎本と同じ「あさましとも」までを欠くのである。これに対し京大本は「うれしともあさましとも」をすべて有する。すなわちこの例からは、京大本ほか「うれしともあさましとも」→二松学舎本「うれしとも」→書甲本・松平本「ナシ」という本文の変遷過程をたどることができ、自ずと二松学舎本の位置も明らかとなってくるのである。

右のように見れば、残るは、二松学舎本が書甲本・松平本に対しどのような位置にあるか、さらに言えば書甲本・松平本の親本であるか否か、という問題であろう。結論から述べれば、二松学舎本を他二本の親本とは見なしがたい。

【例6】

半夜もすからかうのもとにてたゝすみつゝいまたそのまゝにて
そをはすやうなりし

↓よもすからかうしのもとにてたゝすみつゝいまたそのまゝ
にておはすへかめれ(二十四才・一)

クいまそかの物のけにいひけんことにこの語給しはつせの御
しるへもありかたくおほえて

↓いまそかのものけのいひけんことあま君のかたり給ひし
はつせの御しるへもありかたくおほえて(四十五才・8)

キは二松学舎本以外すべて仮名遣いまで異同なく、クは次のように用字に若干の異同が見えるのみである。

尼君(東海大学桃園文庫蔵九条種通筆本・祐徳稲荷神社中川文
庫蔵本・京大本)

あまきみ(書甲本)

これに対し二松学舎本は、おそらく現在まだ知られていないかあるいは逸してしまった伝本に「尼公」と表記する一本があり、それを「にこう」と仮名表記で写したものと推察される。

他にも同様の例は多いが、右のように二松学舎本が独自の本文異同を有していること、書甲本・松平本にそれが引き継がれていないことから、二松学舎本を直接の親として書甲本・松平本が成立したのでないことは明らかと言えよう。

おわりに

以上、二松学舎大学付属図書館蔵本について、紹介を兼ね、『山路の露』伝本群における位置付けを検討してきた。伝本二系統のうち

二類本は改作本文であり、出版もされていない。がしかし、着実に書写・享受されていたことを、二松学舎本をはじめとする現存伝本群が如実に語ってくれている。二類本がどれほど流布していたものか、いまだ明らかではないが、なお知られていない現存伝本もあるものと思われる。それらを一つ一つ発掘・調査することにより、この作品、とりわけ二類本の享受の実態に迫ることも可能であろう。本稿がその一助となれば幸いである。

〔注〕

(1) 早くに池田亀鑑氏『古本山路の露』（日本古典全書『源氏物語』七（昭和30 朝日新聞社）所収）によつて版本と異なる本文として九条植通筆本が紹介された後、本位田重美氏『源氏物語 山路の露』（昭45 笠間書院）が阿系統を比較考察され、二系統の分類指標を示された。

(2) 山内洋一郎氏『源氏物語 山路の露 本文と総索引』（笠間書院叢刊113（笠間書院 平8））。

(3) 小川（岡）『山路の露』二類本独自本文の生成とその性格（『中古文学』第71号 平15・5）。

(4) 一類本の引用は慶安三年山本春正奥書「絵入源氏物語」付載の版本による。

(5) 小川（岡）『山路の露』伝本研究——二類本九本の位置付けについて——（『国文学攷』第175号 平14・9）。

〔付記〕 貴重な蔵書の閲覧を許可して下さった二松学舎大学附属図書館ならびに山崎正伸先生はじめ関係者の方々に記して厚く御礼申し上げます。

——おがわ・ようこ、日本学術振興会特別研究員——